

震災記録を収集・保存し、将来に役立てる

－神戸大学「震災文庫」の10年

渡邊隆弘（神戸大学附属図書館）

watanabe@lib.kobe-u.ac.jp

0. はじめに

●神戸大学附属図書館「震災文庫」（阪神・淡路大震災関係資料文庫）¹

- ・被災地にある総合大学図書館の責務として
- ・関係資料を網羅的に収集し、一般公開（1995～） 現在約 39,000 点
- ・インターネットによる情報発信 「震災デジタルアーカイブ」（1999～）

●震災文庫展示会「資料でたどる阪神・淡路大震災の記録と記憶」（2004.11.8～14）

- ・来場者 887 人

災害記録の収集・保存・提供は、他のご報告で示される直接的な災害対応に比べれば「後衛」に位置するが、図書館という専門家組織の能力を被災地で生かしていく社会的活動の一つの姿である。「災害と図書館」に関する討議の材料として、10年目を迎えた「震災文庫」の活動と、その活動から見てきたことについて報告したい。

1. 「震災文庫」10年の歩み

●震災文庫の発足

1995.1.17	阪神・淡路大震災
1995.1.23 ころ	図書館内整理作業開始
1995.1.30	図書館開館（ただし、書庫は閉鎖）
1995.2.9	一部館室を除き書庫復旧・利用再開
1995.2.20	全館で書庫復旧 このころ、都市ガス・スチーム暖房復旧
1995.3	年度内に概ね通常体制に 震災関係資料への関心
1995.5	収集方針を作成し、収集活動開始
1995.7.6	インターネットで「収書速報」提供開始
1995.10.30	「震災文庫」一般公開開始（1,000 余点でスタート） 「震災文庫ホームページ」開設

¹ 震災文庫全般について書かれた公開文献を末尾にまとめた

●発足当初からの「3大方針」

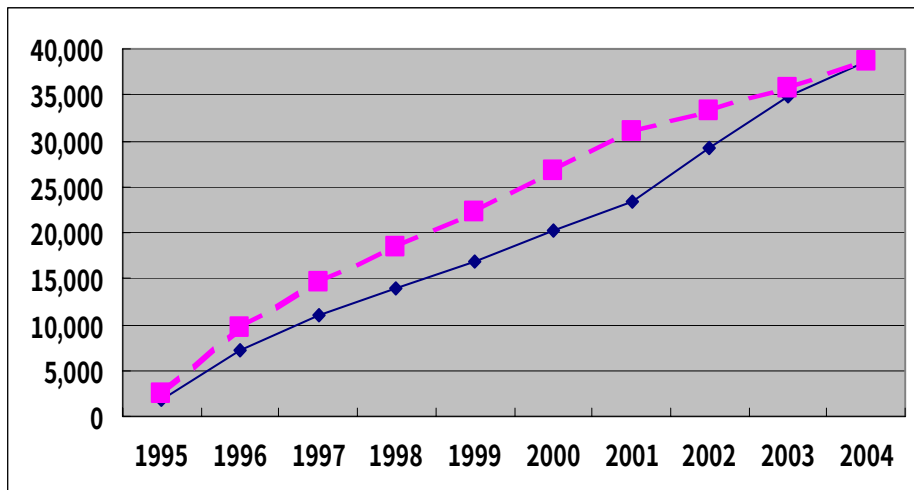
- ・ 阪神・淡路大震災関係資料の網羅的収集
公開できるなら、どのような断片的なものでも
「阪神・淡路大震災」に絞り込んで深く収集
（「地震一般」などには敢えて拡張しない）
- ・ 一般に広く公開
市民の協力に頼った収集活動のため、一般公開が当然
- ・ インターネットの最大限利用
公開開始と同時に WWW ページ開設

●震災文庫のその後

1996	第 31 回国立大学図書館協議会賞受賞
1997?	一枚ものの資料のデジタル公開開始
1999.7	「神戸大学電子図書館システム」稼働 (震災デジタルアーカイブ)
2000.11	5 周年記念講演会
2003.2	電子図書館システム更新
2004.10	図書館増築に伴い文庫室リニューアル
2004.11	展示会・記念講演会
2005.1	国連防災会議「総合防災展」に出展

●今も続く資料収集

- ・ 2005.1 現在 約 39,000 点の資料
（1995.10 開設時は 2,000 点程度）
- ・ 最近も年間 2,000～3,000 点を収集



注) 各年 10 月末時点の資料数

実線が統計数値だが、途中でカウント方法を順次変更（広報紙類をタイトル単位から各号ごとの集計に）したため、実際の増加率と合わない

→ 点線は上記を補正した場合の推計値グラフ

2. さまざまな震災資料

	点数（タイトル数）		点数（タイトル数）
図書資料	5,427 (4,872)	写真資料	83 (81)
雑誌資料	11,210 (2,886)	地図資料	132 (126)
新聞・広報紙資料	11,671 (1,981)	映像資料	191 (164)
パンフレット資料	4,660 (4,621)	音声資料	67 (67)
一枚もの資料	5,362 (5,362)	コンピュータ資料	69 (69)
		総合計	38,872 (20,223)

注）2005.1.21 現在

雑誌等の各号を1冊ずつ数えた数が「点」（件）、同一タイトルは1と数えたのが「タイトル」。

写真資料はコレクション単位（概ね撮影者単位）を1としているため、点数が少ない（約2万枚のコレクションなどもある。）

●あらゆる媒体（形態）のものを収集

- ・震災に関係ある内容ならどのような資料も
→ 媒体の多様性
- ・一部分だけが関係する資料も多い（抜刷・切抜・抜粋等を含む）
→ 資料となる単位の多様性

●各資料の特徴－媒体別

- ・図書
まとまった報告書が様々な団体から（自らの軌跡を「残す」意識）
地方自治体、病院・保健関係、ボランティア団体など、特に多い
- ・雑誌
総合誌、学術誌の他に、趣味の雑誌や情報誌も
（関係記事が1ページでもあれば）
- ・新聞
新聞各紙の原紙を1996.3月分まで保存（縮刷版は東京本社版のみのため）
- ・広報紙類
行政の広報紙のほか、様々なミニコミ紙も
- ・パンフレット類
パンフレット、レジュメ、会議資料、避難所資料などさまざま
- ・一枚もの
震災直後・・・手書きチラシやFAX連絡など、鉄道掲示ポスターなど
復興過程・・・様々な催しの案内などが主流
- ・地図
震災直後の被害調査地図などが特徴的
- ・写真・映像・音声など
一般の方が撮影・録音されたものも多い
音楽資料も一定量あり

3. 資料の収集と保存

●能動的な収集活動

- ・関係資料の網羅的収集
公開できるなら、どのような断片的なものでも収集
「阪神・淡路大震災」に絞り込んで深く収集
- ・必然的に、市販資料は少数派
大部分は寄贈による収集で成立
- ・さまざまなアンテナが必要
資料の存在・発生の把握（出版流通情報に頼れない）
資料発生源とのコンタクト（連絡先調査を行い、寄贈依頼）
震災文庫活動への認知（広報活動の重要性）

●資料発生を把握するさまざまな手段

- ・毎日の新聞記事チェック（最も基本）
- ・各種機関との協力関係（発生のつど寄贈）
- ・大学図書館という環境を生かして
図書館の通常受入資料から関連記事搜索
各種の学術データベースなどから検索
- ・広報活動を積極的に行い、連絡を待つ
→多くは労働集約的作業（担当者の努力がすべて）

●資料収集の連鎖反応

- ・資料をめぐるやりとり（寄贈依頼、デジタル化許諾依頼）が、さらなる資料を呼ぶ
「こんなものでも資料になるのか」・・・具体的な資料を挟んでの対話に効果

●資料の保存－公開と両立した保存

- ・利用してもらいつつ、劣化させないように
- ・直接触ることなく閲覧可能な収納方法が基本
薄いパンフ・レジュメ・・・透明表紙で簡易製本
チラシ等一枚もの・・・ハード（硬質）のカードケース
新聞形式・・・分解してクリアファイル
重要な地図など・・・「エンキャプスレーター」（超音波による真空封入）
- ・デジタル技術による保存
一般の方の写真は主に PhotoCD で所蔵（ネガは撮影者にお返し）
デジタル化時に公開用に加えて、保存用の精細画像も作成
ただし、全資料については困難・・・コスト、著作権
（デジタル化して、現物が捨てられるわけではない）

4. 資料の公開と利用

●利用の2形態

- ・来館利用
- ・インターネットによる利用（デジタルアーカイブ）
- ・両者ともに、所属等を問わず広く一般に開放

●来館利用

- ・閲覧室の一角から、独立した広いスペースへ（2004.10）
- ・開館時間：平日11～17時
- ・利用資格：特になし（一般公開）
- ・利用方式：閲覧、複写（保存等のため、館外貸出はせず）

●レファレンス対応

- ・来館、電話、電子メールを問わず、できる限り対応

●資料組織

- ・利用者の情報要求の多様性
 - 他に頼れる二次資料類がない
 - 通常の図書館目録レベルでは不十分
- ・レファレンスデータベースの役割を果たす目録
 - 「震災デジタルアーカイブ」のメタデータ管理²
 - 詳細なデータ入力 노력
 - 記事単位、章節単位で検索可能
 - 写真一枚一枚のキャプション情報から検索可能
- ・資料分類は簡略（16分類のみ 主題からの通覧は不完全）
- ・基本的には「資料」単位の組織化
 - 文書館等で記録史料を扱う方法（「原秩序維持」）とは異なり、図書館的手法

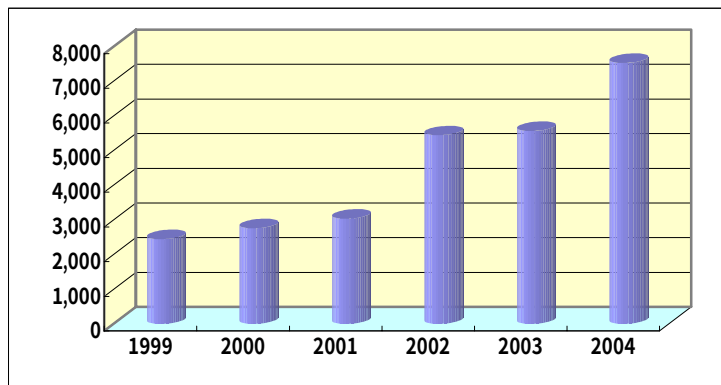
●震災デジタルアーカイブの歩み

- ・1995 「震災文庫ホームページ」立ち上げ
 - 資料目録の検索など（「何があるか」の情報）
 - インターネットが普及しはじめた時期
 - （空間的・時間的制約を打破する情報提供をめざす）
- ・1999 「神戸大学電子図書館システム」事業
 - 特別予算措置によりさらに飛躍
 - より詳細な目録、さまざまな資料のデジタル化（資料そのものも提供）

² 渡邊隆弘「震災デジタルアーカイブにおけるメタデータの管理と検索：資料中の構成要素の取扱いを中心に」『図書館界』56(1), 2004.5 pp.14-29

●「震災デジタルアーカイブ」の公開と利用

- ・「震災文庫ホームページ」から <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>
- ・「デジタルギャラリー」等から、机上で資料の内容が閲覧できる
 - 図書・冊子等 約 1,000 点（約 35,000 ページ相当）
 - チラシ・ビラ等 約 3,000 点
 - 写真 約 24,000 枚
 - その他、映像・音声など
- ・2001 年ころから「アーカイブ」の名に恥じないデータ量に
- ・著作権者の了解を得てデジタル化（チラシ 1 枚でも）
- ・「地図から写真を検索」（2003～）など新機能も装備
- ・トップページアクセス数（月間平均）



- ・近年は、写真等の二次利用申し出も急増

5. 震災記録収集と図書館活動

●阪神・淡路大震災と「記録」「資料」

- ・震災直後から大量の資料が発生（これまでの災害等と比べても）
- ・行政だけでなく、様々な組織・個人が記録を作成
 - 震災文庫収集の図書資料分析（寺田 1997）³
 - 震災 2 ヶ月後の 1995.3 に最初のピーク、次のピークは 1996.1（1 周年）
- ・さまざまな人々の「記録意識」の高まり⁴
 - 情報発信を容易にする技術進歩（ワープロ、コピー）もあいまって、多くの資料
- ・さまざまな人々の「記録保存意識」の高まり
 - 普通なら残らないもの（チラシ、ポスター、日誌、レジュメ...）も残っていく

³ 寺田匡宏「復興と歴史意識：阪神大震災記録保存運動の現在」『歴史学研究』701, 1997.9. pp.31-41.

⁴ 寺田氏は注 2 論文で「体験した揺れが歴史的イベントである」という「歴史意識」と表現している。

●震災記録収集・保存活動と震災文庫

- ・図書館以外の機関でも震災記録保存に取り組む動き（震災直後から）
 - 被災地域の NPO
 - 「震災記録情報センター」「震災・活動記録室」（活動終了）
 - 「震災・まちのアーカイブ⁵」「人・街・ながた震災資料室」（今も活動）
 - 研究者組織
 - 防災関係：「KOBENet⁶」（東大生産研）、立命館大学震災プロジェクト⁷
（現在は、いずれも休止状態）
 - 歴史関係：「歴史資料ネットワーク（史料ネット）⁸」（神戸大）
 - 兵庫県「人と防災未来センター⁹」（博物館＋文書館の機能）
一次資料を中心に約 18 万件
- ・震災文庫の特色・・・「図書館」における資料収集・保存
広く一般公開を前提（公開可能なものを収集、公開のための資料組織）

●図書館における震災資料収集活動と震災文庫

- ・他の公立図書館・大学図書館等でも震災資料収集への取り組み
 - 「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」（1995.4 発足）¹⁰
情報交換・調査活動
 - 個人レベル → 分担収集といった組織連携には至らず
 - 多くの公共図書館・大学図書館で独自に資料収集
- ・震災文庫の特色・・・「図書館」では普通扱わない資料まで対象に
チラシ、ポスター、レジュメ、広報紙、写真...
（収集・保存・利用のすべてにわたって未体験ゾーン）

6. 震災記録の持つ意味：「震災文庫展示会」から

●「震災文庫展示会」

- ・神戸大学「阪神・淡路大震災十周年事業」の一環
- ・図書館のホールを使い、11 月の 1 週間（学園祭の週末を含む）
- ・8 テーマで資料計 115 点＋電子展示
 - 「報道せよ！」（新聞号外など）、
 - 「空から見た傷跡」（航空写真、被災地図など）、
 - 「行政と住民による私たちのまちづくり」（行政資料、市民の要望書など）、
 - 「避難所では...」（神戸大避難所資料など）、
 - 「ボランティア活動資料」（当時の手書きチラシなど）、
 - 「震災直後の鉄道輸送」（駅貼りポスターなど）、
 - 「こころの復興」（音楽 CD など）

⁵ http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/

⁶ <http://ares.iis.u-tokyo.ac.jp/kobenet/>

⁷ <http://www.ritsumei.ac.jp/kic/ea/>

⁸ <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/>

⁹ <http://www.dri.ne.jp/>

¹⁰ 宮本博「阪神・淡路大震災記録資料を未来へ伝える：震災記録を残すライブラリアンネットワーク」『記録と史料』8, 1997.10. pp.4-11.

「明日への備えを」(防災マニュアル、非常袋など)

- ・記念講演会(11/12)

岩崎信彦(文学部教授)「震災文庫から<震災>を読み解こう」

渡邊隆弘(図書館)「震災文庫の足跡—10年を振り返る」

●開催へ、一抹の不安(個人的に)

- ・10年経って、大学まで足を運んで見てみようという人がどれだけいるのか
- ・展示のインパクトが強くない ⇔ あまりセンセーショナルにもしたくない
- ・100点ぐらいの資料で震災を(あるいは震災文庫を)表現できるのか
- ・被災された方にどう映るのか

●開催してみても 震災記録・資料を集め、伝えていく意味とは

- ・来場者 887名(講演会 99名を含む)
うち学外者 650名以上
(神戸市 225 兵庫県内 118 県外 174 他機関・報道 40 他は不明)
- ・アンケート よかった 212 普通 56 よくない 1
- ・驚いたこと
 - ＊ 来場者の平均滞在時間の長さ
 - ＊ アンケート回収率(31%)、自由記述欄記述率(59%)
 - ＊ 会話の場に(来場者どうし、来場者と係員)
 - ＊ 資料の寄贈も...

<アンケート自由記述欄から>

- ・今回の展示の号外や報道記録を見て、知らないことが多すぎたと感じました。震災を体験していても、何がおこっているのか、自分に見えたものしかわかっていませんでした。当事者には逆にわからない客観的な視点が新聞にはあり、なるほどなあと思いました。(神大院生)
- ・震災被災者にとって、当時の状況がその時はつかめませんでした。県外へ避難したものには神戸の状況把握出来ませんでした。貴重な資料まとめられ、感謝します。(学外・神戸市内)
- ・震災の時は被災地の真ん中にいて情報が全くなかった。今、当時のマスコミの報道を見て、こういう風に報道されていたのかと感慨無量であり、驚きもしている。(神大職員)
- ・書籍等の充実はもちろんだが、映像や音声資料の伝える力も大きいと改めて感じた。生活のあらゆる部分から立ち上がってくる資料には大きな意味があると思う。(中略)その時は僕は小学生。僕自身は大きな被害は受けなかったけれど、子どもながら記憶していたこともあるんだなと思わされた。(神大学生)
- ・10年も経過しているのに、又あの現場に戻ったようで胸がつまり、いろいろな事が昨日の事のように思い出されました。(学外)
- ・忘れかけていた、心の深くに閉じこめていた記憶に少々ふれることができ、心の有様が少し開かされた気がします。(学外・神戸市内)
- ・当時の災害の様子は5年間位はまともに見えませんでした、最近になって普通に見れる様になりました。沢山の資料が整理されていて嬉しいです。(学外・神戸市内)
- ・神戸で生まれ育ち、震災と復興を見てきましたが、今日改めて10年前を振り返り、地震の恐ろしさと多くの方々の頑張りを思い出し、胸が詰まる思いがしました。(神大院生)
- ・あの頃の事が色々思い出されました。現在も新たな震災で被災者がおられるので、今までの蓄積された知識がその人々の役に立ち、早いペースでの復興の力となることを期待します。(学外・大阪府)
- ・収集の多さにびっくりしました。知らない所でいろんな団体・個人が復興にむけて努力していた事がよくわかった。(学外・神戸市内)
- ・先日の新潟での地震に神戸での地震でのボランティアなどの教訓が生かされていることがよく分かりました。そして、もう10年も前の地震ではありますが、その傷は何年もかかってどんどん治ってきているにもかかわらず、一生消えないものであることがよく分かりました。(学外・高校生)
- ・2年ほど前に震災文庫を見学したことがあります、資料の多さに何からどう見て良いか、という感じでした。このような形で公開していただけるのはうれしいです。(学外・神戸市内)
- ・震災体験者としてその記憶は消えないが、軽微の被害だったので冷静に見られるのかもしれない。あとになる(時間が過ぎる)程、一寸したメモの重みを感じられるものがある。(学外・神戸市内)
- ・いつも通っている場所の地震後と今の変わり様に愕然としました。今の様子からは想像もできない変わりようでした。(神大学生)

7. 中越大震災の被災地で：我々にはできなかったこと

●資料収集の早い立ち上がり

- ・新潟県立図書館「新潟県中越大震災関係文献速報」（11月分から）¹¹
県立図書館では、新潟県中越大震災の記録・資料等を、できるだけ収集、保存し、提供していくことが重要な使命であると考えています。このたび、収集した資料をご紹介します「新潟県中越大震災関係文献速報」を作成し、公開することといたしました。この速報では、県立図書館が受入れた、図書、雑誌（記事）、市町村広報等の資料を、月毎にまとめ、公開します。
- ・新潟県立図書館では「資料コーナー設置」も（12/14～）

●より機動的な情報提供：新潟赤十字病院図書室

- ・「电脑版図書室だより」に「新潟県中越大震災」ページ¹²
「新潟県中越大震災に関する地震災害・復興情報、医療情報や図書文献情報をお伝えします」
- ・作成開始：11月9日
- ・インターネットでみる地震・災害・復興情報リンク集
図書館／医療・看護／メディア／赤十字・行政／地震・気象・交通
- ・関連図書・文献リスト
図書室所蔵文献リスト／たこつば型心筋症／生活不活発病
- ・その他、新潟県立看護大学図書館でも「災害看護・地震関連文献コーナー」（11/1～）
- ・蓄積的な資料収集とはまた違った姿の情報提供

8. おわりに ―震災文庫のこれまでとこれから

●震災文庫の「これまで」

- ・公開開始時 約 2,000 点 → 約 39,000 点 （誰も予想できなかった数）
- ・網羅的収集の「無謀」さ → 当初の方針を守って「地道」に 10 年

●震災文庫の「これから」

- ・大学、大学図書館をめぐる状況の変化
→ 図書館活動の中で震災文庫をどう位置づけていくかを問い直す必要
- ・永続させていく責務
→ 地域社会との、より強い紐帯を

¹¹ 新潟県立図書館 <http://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/>

トップページに「新潟県中越大震災について」あり（確認：2005.1.23）

¹² <http://www.nagaoka.jrc.or.jp/lib/earthquake.htm> （2005.1.23 現在の情報に基づき記述）

<参考文献：震災文庫について全般的に述べたもの>

稲葉洋子「阪神・淡路大震災関連資料を収集して：灰色文献とインターネット」

『専門図書館』171, 1998.9. pp.81-85.

稲葉洋子「震災資料の保存と公開：神戸大学「震災文庫」を中心として」

『大学図書館研究』55, 1999.3. pp.54-64.

渡邊隆弘「『震災文庫』のこれまでとこれから－電子図書館を中心に」

『Academic Resource Guide』055, 2000.2.15.

渡邊隆弘「『震災文庫』サイトのそれから－一次情報のデジタル化を中心に」

『Academic Resource Guide』096, 2001.4.15.

渡邊隆弘「10年目の震災文庫」

『Academic Resource Guide』197, 2004.11.8.

上記3つはいずれも同一メールマガジンの記事

<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/> からアクセスできる